

Stella は何処へ消えたか

—Murdoch の *The Philosopher's Pupil* について—

大 林 幹 明

I

まず、Stella McCaffrey について考えることから始める。*The Philosopher's Pupil* (Iris Murdoch, 1983) の主人公、George McCaffrey の妻である彼女は、3月の雨の夜、夫 George の運転する車の助手席に乗っている。

A few minutes before his brainstorm, or whatever it was, took place, George McCaffrey was having a quarrel with his wife. It was eleven o'clock on a rainy March evening. They had been visiting George's mother. Now George was driving along the quayside, taking the short-cut along the canal past the iron foot-bridge. It was raining hard.(注)

この小説の書き出しの部分であり、その少し後から二人の会話体で、けんかの様子が描かれるが、

‘George—stop—stop the car—stop—’

‘Hell, hell, hell—’

George wrenched at the wheel, turning the car violently round in the direction of the canal. ... The car swerved, lurching and sliding on the uneven stones,.... (p. 5)

その後車はすぐに運河に沈んだわけではない。“He [George] fell against the back of the car, bracing his feet against the rough stones of the quay and trying to push with open palms upon the back window.” (p. 6) とあるのでどうやら George は落ちかかった車をうしろから押し出したらしい。そして、“Then he fell headlong on the stones.” (p. 6) となる。翌朝彼は自宅のベッドで目をさまし、事件は夢だったと思うが、部屋から出てそこにぬれた服を見出し現実であったことを知る。

一方 Stella については

‘How are we feeling?’

The questioner was Gabriel MaCaffrey, Stella’s sister-in-law.

Stella continued to cry, saying nothing. (p. 9)

とあり、半ページほど後に

Father Bernard Jacoby had telephoned Brian and Gabriel on the previous night to tell them about the accident, the car in the canal, Stella and George safe, Stella in hospital, George gone home. ... It was now nine o’clock in the morning. Stella, in a private room, was propped up in bed. (p. 10)

とあるので読者は彼女が病院に収容されたことを知る。その後 George と彼の母 Alexandra が見舞に来たところで、Prelude i, An Accident は終了する。

Prelude ii, Our Town は、この小説の舞台となる Ennistone の歴史とそこに住む主要な人物を紹介風に述べた15頁ほどの部分であるが、ここには Stella に関する記述はないし、もちろん彼女は登場しない。

従って、Prelude i, An Accident において述べられたのみの事情を知った状況で本文、The Events in Our Town に入るわけである。

Stella は何処へ消えたか

The Events in Our Town における Stella の扱い方はおよそ3つの類型に分けられる。

その最初は “Gabriel thought Stella should come and stay with them [Gabriel and Brian].” (p. 37) にみられるように、ある登場人物が彼女のことを考えているという扱い方である。

次は会話体の中で言及される。

(1)

‘How is Stella?’

‘Wonderful,’ said Gabriel.

‘Of course, but how is she?’ (p. 45)

あるいは

(2)

‘Do we have to have Stella here?’

‘I think so.’

‘She wouldn’t come.’

‘I talked to her again, very tactfully. I think she’s afraid to go back to George.’ (p. 49)

このように登場人物の会話の中に登場させるということは何を意味するか。通常我々読者は、例えば Narrator が述べる記述を通してそれぞれの人物を知る。この場合はなるほど、Narrator を介しているとはいっても、そこで述べられた人物については、一応我々に直接示されたという理解というか了解がなりたっている。従ってたとえ登場人物がそこにいなくても、読者はその人物について直接知らされていることと同じと考えていい。しかし前記に引用した形で、会話の中に示されるとどうなるか。読者が読んでいるのは、というより読

者が読みながら頭に思い描いているのはあくまでも会話を交している人物たちであって、彼らがどういう状態、例えばどんな部屋にいて、何を着ているとか、パーティーを行なっているとか、会議をしているとか等々そういうことは直接思い描いて、イメージをふくらませることは出来ても、その会話の中に述べられた事態についてはあくまでも間接的なものとしての印象にとどまる。先に(1)に引用した部分を例にとると、実はここは Bernard 神父が Gabriel と会話をしているところなのだが、その前の部分に、

Father Bernard was fairly tall, a handsome man though odd-looking. He wore his dark straight sleek hair parted in the middle and falling in fine order to the level of his chin. He had a large nose with prominent nostrils, and rather shiny or luminous brown eyes whose penetrating directness expressed (perhaps) loving care or (perhaps) bland impertinence. He was thin, with thin mobile hands. He always wore a black cassock, clean, and of material suited to the season, and somehow managed to make his dogcollar look like old lace. (p. 45)

という記述があるし、もちろん Gabriel についてはそれ以前の段階で何ほどのイメージを我々はもっているのです、そのような二人が話を交しているという場面を描くのが普通であり、その会話の中から、Stella が元気であるという情報を得るので、そこには一段クッションが入るという構造になっている。いってみれば読者は伝聞で Stella について知るという形になっている。従って引用(2)からどうやら Brian と Gabriel 夫妻が Stella を引取ることになるらしいということを知るけれども、それも二人の会話から推測するという形であって、読者に直接伝へられるというわけではない。

このことは、ただ単にそういう形式の相違があるというだけのものではない。ここで読者は、小説の中で会話を交わしている登場人物が形成する一つの場に参加していると考えることも可能である。ただ読者はその会話で自ずから

Stella は何処へ消えたか

発言していないけれども、聞き手の一人になっているということは言い得るはずである。しかしその会話の中で言及されている人物、この例でいえば Stella は参加していない。読者にとっては、彼女はある約束された一つの場の外にいて、ということは、彼女は読者とは直接つながっていないという関係にならざるを得ない。もうすこし話を極端に言えば、Stella は実はこういう扱かわれかたをした場合は、当然そこにいる登場人物とは異なる場に存在している。そしてこの小説での Stella の扱い方はこの方法によるものが最も頻繁に用いられていることに注意を留めておく必要がある。

第三の扱いは、通常小説で用いられる普通の方法である。例えば

Stella MaCaffrey, *née* Henriques, was lying on the sofa in the sitting-room at Brian and Gabriel's house....

Stella was lying back propped up on cushions. Her legs were extended and covered with a blue-and-white chequered rug. (p. 99)

にみられる記述で、ここから約2頁は病院から Brian 夫妻の家に来た Stella についての説明で、この形式で述べられている。しかし全体をみるとこの方法はそれほど多いとは言えない。

Stella に関しての記述の様式は以上3通りの方法があるのだが、彼女が読者の前から姿を消す時の様子は以下のように書かれている。

Gabriel had arrived. She swept in, in dripping mac and black sou'wester, and plumped down at Brian's table.

'You're late,' said Brian.

'She's gone.'

'Who's gone?'

'Stella. She disappeared while I was out shopping. She left a note just saying she felt she should go and not to worry.' (p. 183)

Stella は何処へ消えたか

従って読者は彼女が姿を消したことを Gabriel と Brian の会話を通して知るわけであるが、彼女がいなくなったことを直接知らされたというようにはなっていない。

その後彼女に言及される場合の例を順次みていくと、

‘Any news of Stella? Alex said this,....’

‘No’ said George after a moment.... (p. 244)

‘May I ask if you have had any news from Stella?’

‘No,’ said Gabriel, ‘I’m very worried, she hasn’t written, she’s just vanished. It isn’t like her.’ (p. 292)

‘Be a sport, Diane. I say, is it true that George has murdered Stella? That’s what they are all saying.’ Tom uttered these idiotic words as a sort of joke. (p. 295)

‘George, you are not going back to Stella, are you?’

‘Have I been away? She has.’

‘George, where is she?’

‘How do I know?’ (p. 307)

‘If only Stella were here,’ said Gabriel, as she spread out a large tartan rug,.... (p. 336)

What indeed! ‘How I wish I hadn’t missed seeing Stella that day at Brian’s place.’

‘Yes, you just missed her....’

‘But where is she?’

'In London. Or gone back to her father in Tokyo is my guess.

(p. 340)

その後 George が夢で Stella を見たという話し手の記述が入ったあと、彼女は突然読者の前に姿をあらわす。しかしその場合の彼女の扱いは前記3類型とは大変異なっていて、話し手が同時に姿をあらわし、話し手と Stella との対話という形をとり、同時に小説中の登場人物には、Stella の所在はわからないようになっている。この点は後に論ずるので、ここでは不明になった彼女が姿をあらわすが、それは対読者との関係で姿をあらわすのだけれど、小説の登場人物との関係ではそれまでと何ら変わらず、彼らは依然として Stella がどこにいるか知らない状態にあるということを指摘するにとどめる。

この段階で小説は約6割方進行しているのだが、その直後に “the Slipper House Riot” という事件が発生し、事態は急速に動いていくことになるのだけれども、その間 Stella に関する情報のみは同じように呈示されるが本人はあらわれない。

'Have you seen Stella?'

'No'

'He [George] can't have killed her. Where's she gone?'

'To Tokyo, go to Tokyo, go anywhere, do anything. (p. 376)

'Where's Stella, isn't it time she came back to join in all the fun we're having?'

'I don't know where she is. I like Stella.' (p. 453)

It's like a conspiracy,' said Gabriel, unconsciously waving her hand about.

'Isn't it wicked to try to kill one's wife? Wouldn't you think I was

wicked if I tried to kill you?

‘But he didn’t. It was an accident.’

‘Then why hasn’t Stella come back? Think *that* one out. Stella’s afraid. That brave strong woman is afraid.’ (p. 497)

‘George,’ said Brian, ‘let me ask you straight, and under God or whatever you believed in, whether you did or did not try to kill Stella that night....’ (p. 498)

という具合で、すべては伝聞の形でしか Stella については述べられていない。もっとも “He [George] thought, hold on, it will pass. Then somewhere inside the sick weight where he no longer was came the thought, where is Stella, where *is* she?” (p. 398) という一文はあるけれども、この “Where is Stella, where *is* she?” は明きらかに George が心の内で思っていることであって、これも本来なら間接的な伝達形態に入る種類のものであって、読者に対し直接伝へられているという性質のものではない。

結局彼女が現実の登場人物の前に姿をあらわすのは、この小説が9割方進行した時点である。もっと正確に、即わち、Prelude と、後日の経過を述べた What Happened Afterwards を除けば、終る直前である。

He [George] reached Druidsdale and got the key into the lock. His hand trembled. He opened the door and entered the darkish hall. He stopped. There was something wrong. There was something there. Something *terrible*. He peered. Stella was sitting on the stairs. (p. 503)

というわけで、Gabriel と Brian の家から姿を消した彼女はそれまで様々な伝聞の形で語られてきた状態に終止符をうち、小説の終了直前に登場人物、ここでは夫 George の前に姿をあらわした。

このように小説中の重要な人物がその存在場所を隠されて話題にされてくるということを、小説の要素としての人物という視点からどう考えたらいいのであろうか。実際彼女に関する記述で実質的なものは、冒頭の部分が第一。ここでは、夫 George が雨の中を運転する車の助手席で彼と口論する姿が描かれていて、これは、けんかの場面であるから通常の状態と異なると言えば異なるけれど彼女の一面が鮮明に出ていて印象としては面白い。

第2は、これもごく早い場面で、George について述べながら、彼がまだ若く London の大学生であった頃に彼女と知り合い一緒になった経緯を述べた件りである。この場面は普通の小説にみられる記述であって、彼女の人となり、George の性格との対比、二人の愛の性格などである。

その後彼女が Gabriel, Brian の許にいる時の記述を、話し手が介在する場面を除けば、あとは最後の場にいたるまで彼女の存在をにおわす伝聞の記述以外はなにもないので、その他の登場人物についての詳細な記述と比較すれば、彼女に関するものは非常にすくないといえる。しかしそれなるが故に読者の興味は、一体彼女がいつどんな形で姿をあらわすかという点に集中して、この小説の流れに普通のそれとは異なった緊張感を与えるという効果がある。この効果との関連で一時棚上げした話し手の介在の問題を検討しなければならない。

II

Prelude ii, Our Town の最初の部分は次のとうりである。

I am the narrator; a discreet and self-effacing narrator. This book is not about me. I knew, though not in most cases at all well, a number of the *dramatis personae* and I lived (and live) in the town where events here in after recounted took place. For purposes of convenience, for instance so that my 'characters' may be able (very occasionally) to refer to me or address me, I shall call myself 'N'. But as far as this

drama is concerned I am a shadow. Nemo, not the masked presence or secret voice of one of the main characters. I am an observer, a student of human nature, a moralist, a man; and will allow myself here and there the discreet luxury of moralizing. (p. 16)

従ってこの小説は‘N’という話し手が物語るという体裁をとっている。実際は *Prelude ii, Our Town* でこそ話し手として自ずから顔をのぞかせつつ *Ennistone* の町を説明してはいるけれども、*The Events in Our Town* では話し手として介在することはなく、第三人称小説として登場人物を説明しながら物語を展開させていくごく普通の手法である。もちろん話し手と人称の関係で論ずれば問題は別にでてくるけれども、ここではごく普通の小説といって問題はない。語り手は引用の最初のところで、自ずから自由に小説の中に顔を出させてもらうという趣旨のことを言っているけれども、語り手‘N’が何かを述べることはない。ところが一度だけNは小説の中に自ずから名乗りでるのである。それは先にすこしふれたように話が6割方すすんだ状態のところである。前後の事情を説明すれば次のようなことになる。

MaCaffrey 家では毎年5月に小休暇をとってすごすことになっている。その年はかつて、Alex が所有していた *Marryville* という別荘の近くの海岸が選ばれた。諸々の事情から一泊の休暇になったが、かつて彼らの所有であった家の近くの海岸ですごしながら、結局そこを訪ねることなく帰っていく。ところが実はその別荘に話し手Nと Stella は来ていた。彼らが帰ったのを見とどけて二人は読者の前に姿をあらわす。そこでNは次のように言うことになる。

I should explain that I, N, the narrator, am about to intrude (though not for long) into the narrative, not to exhibit myself, but simply to offer an unavoidable explanation. People in *Ennistone* had been wondering whither Stella had fled, where she had so mysteriously gone to. Well she had gone to me. (p. 362)

Stella は何処へ消えたか

従って読者は Stella が他ならぬ語り手 N とともにいたことを知ると同時にそれまでの事情や現在のこと及び他の登場人物との関係などを、N と Stella の会話を通して知らされる。

ここで我々はどうしても、Evelyn Waugh の *Decline and Fall* の Part II Interlude in Belgravia を思い浮かべることとなる。ここでは話し手が顔を出して、登場人物 Paul Pennyfeather は影の存在にしかすぎないというコメントをする場面がある。主人公を影のような存在だという点と、Stella についてコメントを加え次いで会話を交すという相違はあっても、それまでの流れの中に話し手が顔を出してくるという意味で通底するものを持つと同時に、冒頭では語り手自身を影であり主人公や他の人物の代弁者ではないと規定する違いはあるにしても、そしてほとんど顔を出さずに来た語り手が、説明をしなければならぬという理由によって表面に出てくるのは小説全体の構成に変化を与えるという点で興味ある手法なのだけれども、問題はその効果である。

先にこの小説中で、Stella の行方がわからなくなってしまったため、読者は彼女が、いつ、どのような姿で再びあらわれるかに興味をひかれてこの小説の流れに緊張を与えているという趣旨のことを書いたけれども、この部分の存在によってその緊張は破られないか。犯人のわかった推理小説を読むのは面白くないけれども、それと似た結果を生じさせてしまうことはないか。このことは大いに心配されていていい事がらであろう。しかしここで注意すべきことは、実はここから先、この小説は二重の構造を生ずることである。何故ならば、この部分の存在によって、読者は今 Stella が何処にいて、何故そうで、どういう状態であるかを知っているのに対して、小説の登場人物は依然として彼女について何も知らない。何処にいて、何をしているのかは全然わかっていないという構造である。いいかえるならば、Stella と登場人物との関係ということになるとこれはそれまでと何ら変化していないのであって、ということは最初から、あるいは彼女が Gabriel と Brian の許から消えてしまった時と同じ状態が続いているわけである。実は彼女は姿をあらわしてはいないのである。

これに対して読者の場合は事情は異なる。どう異なるかといえば、読者はこ

の段階で、Stella がどこで、どのような状況にいるかを知ってしまったということである。となると前に、すでに犯人がわかった状態と書いたけれども、実際この小説についていえばその舞台の楽屋裏を見てしまったようなものとも言えようか。とにかくこの場面を境として読者の地位は、どちらかというと話者の立場に近い状態となる。にもかかわらず話者にはなり得ないとする、そこに自ずと別の立場が生じて、それまでの話者と、Stella について何も知らないという意味で一体となっている登場人物と読者という二極構造が崩壊して、話者、読者、登場人物という三極構造が明確な姿をもって生じてきたということにもなるか。

ではそうなったことによって、この小説に流れていた緊張感はどうなるか。読者はいわば種明かしを知って、気のぬけた発泡飲料でも飲んでいる気分になるかどうか。そうはならないことは、ギリシャ悲劇の例を考えれば了解されよう。オイディプス王の話は当時のギリシアの民衆にはよく知られた話であって、その意味である話の内容は公知のことであるが、だからといって彼らは、ソフォクレスの『オイディプス王』をつまらないと思ったわけではない。この小説にもどれば、以後読者の立場は異なってくるし、異ならざるを得ない。即ちそれまでは Stella の所在や健康状態その他について無知であり、それ故にそのことがどうなるかといった興味が一方にあり、同時に他方で彼女がいつ、いかなる形で我々の前にあらわれてくるかという二本立の興味で読みすすんできた読者は、この時以後前者の部分からは解放されて、もっぱら後者の興味というか問題に焦点をあてた読み方に変化してくる。従ってそこでは、他の登場人物に対する興味においても、彼女があらわれたときに、どのような反応を示すことになるかという点に注目して読みすすめることになる。

思えば、作者が登場人物の一人を小説の舞台正面から退場させてしまったということによって、作者は読者に対し、他の小説を読むのとは異なった緊張を作りだしている。しかも小説の途中で、登場人物にはわからないが読者にはわかるという形である一時点で Stella を舞台にもどすという方法によって、それを境に、前半では他の登場人物に近い状態に読者をおき、後半ではむしろ作者

に近い状態に読者を置くという2つの効果を生みださせるという巧妙な方法をとることによって、読者に異なった緊張感を与えることに成功している。Murdoch の書く小説はここ10年いずれも500頁に及ぶ長い作品であり、これを読み通すのにはかなりの持続力を必要とするが、その持続力を維持させるための工夫として、このように緊張を変化させていくという方法は有効なやり方の一つと思われる。

III

以下関連するいくつかの問題について順次検討を加えておくこととする。

まずこの小説の中で実際に経過した時間はどのくらいであったか。再三 Stella がいなくなった点を論じたけれども、その期間が極端に短い、あるいは小説全体の時間の経過がほんのわずかにすぎないものであれば、特にこのようなことを考えること自体無意味ともなりかねないからである。

本論文の最初に引用した文中に次のような事が書かれている。“It was eleven o'clock on a rainy March evening.” (p. 1)。従って事件の発端は3月のある夕方ということになる。The Events in Our Town がはじまってほどなく “Three days passed since George's exploit. Stella was still in hospital.” (p. 36) からわかるように3日後彼女はいぜんとして病院に入っている。その後の時間の経過としては、土曜日に Ennistone の町の人々が集まる運動、休養施設のことが述べられ、月、水そして恐らく同じ週の土曜日の記述につながり、その土曜日に Stella は病院から Gabriel, Brian 夫妻の許に到着くのだから、事件から10日くらいは経っていようか。

実はこの同じ土曜日と推測される日、哲学者 Rozanov は神父 Bernard と会談の約束をして、それを翌週の火曜日に決める。小説の進行からいくと、その火曜日の前 Stella がいなくなったというので、事件からやはり10日くらい経っている。この小説は時間の経過について、例えば Aldous Huxley の *Eyeless*

Stella は何処へ消えたか

in Gaza にみられるような工夫がこらしてあるわけではない。ならばこの時間の経過については、ごく自然にうけとっていいはずである。ではこの時点はいつごろか。事件の発生が3月だとして、4月になっているかどうかはにわかには決定しがたい。しかし彼女がいなくなってから更に1週間くらい経過した後次のような場面にぶつかる。

‘My God, it is snowing!’

An awful iron grey silence had possessed the town since early morning....

‘Snow in April!’

‘It can snow any time in this bloody country.’ (p. 287)

Stella が姿を消してから少なくとも1週間は経過して4月に入ったと思われる。

更にしばらくすると

The notorious MaCaffrey summer expedition to the seaside was in full swing. The sun was shining, the east wind was blowing, it was now May. The jaunt had, after discussion, settled down to being for one day only,.... (p. 335)

細かい点は一応措くとすれば、ここまでで約1ヶ月が経過していて、この年 MaCaffrey 家の Summer Excursion は1日しかなかった。実は Stella が読者の前に姿をあらわすのは、彼らが海岸からそれぞれ引きあげた後である。従って5月のある日、他の登場人物の多くが集まったとほぼ同じ時に読者は Stella の所在について知ってしまう。

実はこの後の経過は意外と急テンポで進展する。即わち Stella の説明が終ると次の場面に移る。

Stella は何処へ消えたか

‘What’s that strange music?’

‘There’s a fair on the common.’

The distant sound of fair music, ..., faintly and intermittently drifted in the garden at Belmont.... The gingo had on its summer plumage.

(p. 373)

この定期市と、先の Summer Expedition の間がどのくらいかは必ずしもはっきりしないけれどそれほどはなれているとは考えられない。そしてその夜 the Slipper House Riot という騒動がおこって、それは土曜日の夜なのだが、それから一週間後の土曜日 Stella は再び 現実 に George の前に姿をあらわすことになる。

彼女が消えていた期間は、対登場人物との関係においていえば以上のような経過からもわかるとおり、最も短くて2ヶ月、3ヶ月くらいの場合も考えられなくはないけれどだいたいその範囲に収まっていると考えて間違いない。この期間を長いとみるか短いとみるかは意見がわかれるかもしれないけれども、少なくとも彼女が消えていたということを問題にすることが出来る長さであることは確かである。

次に Stella が再び姿をあらわしたことの効果はどういうことか。ただ単にまたあらわれて、それで結構でしたという単なるそれだけではないだろう。実は George には Dianne という別の女がいて、彼女との関係は、Stella がいない間にも進展している。二人の関係は、the Slipper House Riot の後の段階では、次にみられる程度にまで発展している。

George began to eat the sandwiches voraciously. He had not eaten since noon on the previous day. He said,

‘We’re going to Spain.’

‘We?’

'Me and Diane Sedleigh. We're going to live in Spain on my pension.'

'Where in Spain?' said Alex,....

'I don't know yet. Somewhere cheap. We'll have to look at the map, get advice.... It's suddenly occurred to me that I might be able to be happy at last, it's not too late, it's not impossible, have what I want.'

(p. 501)

しかし実際そうはいっても、このことが実現するには、Stella が George の正式の配偶者である以上何らかの決着がつけられねばならないと考えるのが自然であり、その意味でも、彼女がどういう形で George の前にあらわれて、どういう意向を述べるかは、読者としては、大いに知りたいと思うところである。そして彼女があらわれたのは、前記引用の直後であった。上記の会話は George と母親との間で交わされたものであるが、二人がわかれて George が自宅に帰った時そこに Stella が帰っていた。この部分は先に引用した。そして二人はその後次のような話をしている。

'... Were you afraid to come back?'

'Yes, I suppose so —'

'Afraid I'd kill you?'

'No—just afraid of you—you're like a dog that bites—one is afraid. I don't like unpredictable things.'

'Why have you come back then?'

'I had to decide whether I wanted to go on being married to you. That was another reason why I didn't come back. I felt it wouldn't be fair to you.'

What wouldn't be fair?'

'To come back and leave again.'

‘And you decided—?’

‘I decided I did want to go on being married to you.’

‘Why?’

‘You know why. Because I love you. Because I think—this between us is—absolute.’

(p. 504)

ということで Stella は George と結婚関係を継続したいことを明きらかにする。George が, Diane と Spain へ行きたいということを明きらかにした直後に。更に George が車を運河に故意に沈めたかもしれないという事についても彼女は単なる偶発事であると考えていることを示している。

George にとっては、これはこまった展開であろうし、読者にしてももうずいぶん話が進展してこれからまた話がつれそうな事態に直面してはたしてどうなることかと思うのだけれども、実はその後 George は、哲学者で師である Rozanov 殺害を企て、それが契機で事は急転二人は従前の関係をつづけることになる。この展開を考えるならば逆に Stella が再びあらわれた時機、タイミングは大変決定的な時にあたるといえそうである。同時に彼女の役割はその不在によって、ただ単に George の配偶者としての地位、妻であるというただ単にそれだけの理由により意味があるのではなく、不在のあいだはその妻という地位により不可欠の存在、George と Diane の関係が深まればそれだけ重要性を増すという意味においての役割を不在であるが故に果たし、あらわれた後には、自ずから夫を愛し二人の関係を継続する意思を明確に示すことによって、小説の進行に決定的な一石を投じることになるという二重の意味において大きな役割を果たしているわけで、不在にもかかわらずその存在感は確かなものとなっていることを読者は感じとる。

このことに付ずいして、登場人物の扱い方として伝聞形式で読者に伝える方法の効果を一考してみる 価値がある。Murdoch の最新作、*The Message to the Planet* に Marcus という哲学者が登場する。読者は彼の存在を含めて、彼に関する様々のことを知るのだがその若干例を示すと次のようになる。彼は

最初数学の大定理を発見したがまもなく数学をやめて絵に力を入れた。その後また別のことに興味を示した。しかしそれらのことは、彼を知る人々の口を通して会話の形で、あるいは思い出の形ですべて伝聞により読者に伝わる。実際ある時彼は皆の前から姿を消し彼がどこにいるかまたどうしているかは不明であるという状況は、*The Philosopher's Pupil* における Stella と似た立場である。ただ1人 Alfred Ludens が必死にその行方をさがしているのだが、他の人物、Ludens の友人たちはそれを疑問の気持ちをもって見守っている。この小説も500頁を超える長いものであるが、実際に Marcus が読者の前にあらわれてくるのはほぼ五分の一ほどすぎた時点であって、それまでは Stella と同じように他の登場人物の口を通して、あるいは考えの中にあらわれるという構造であり、それ故に、実際に Marcus が読者の前にあらわれた時の印象は大きなものとなる。従来小説の登場人物といえ、そのタイミングはどうであれ、登場する時は実際に登場していることを考えるならば、このような形でその存在を暗示し、またいくつかの事について伝聞の形で呈示はしておいても、その現実の登場時期を工夫するという方法は人物を示すやり方としては一つの面白い方法である。

Stella について以上のように考えた場合、その夫 George についても検討しておかねばならない点が存在する。

この小説は *The Philosopher's Pupil* とあり、George こそは the philosopher's pupil であるから、彼がこの小説の主人公であることは、形式論理を展開すればまさにその通りではあるけれども、実質的にこの小説の中心人物は誰であるかとなると若干検討が必要となる。特に哲学者 John Robert Rozanov がそうである。彼はもちろん George の師であることはそうなのであるが、実は George はこの師 Rozanov にうとんじられたという印象をもっていて、その点をはっきりさせ二人の間に存在する感情的なわだかまりをとり除きたいと願っている。しかし実際に Rozanov はアメリカにいたので直接会って話をすることが出来ない状態にあった。それはこの小説が始まる前のことである。

小説が始まって、Rozanov が Ennistone に帰ってくることになり George にとってはよい機会が到来したと思われる。しかし実際に話はそれほどうまく運ぶわけにはいかなくて、むしろ George の希望とは反対に二人の関係は悪化の方向をたどるとというのが話の展開であって、読者はこの関係がどのように解決されるかという興味をもって読みすすめることになる。一方では我々の前から姿を消した Stella の存在をにらみながら他方では常に話の重要な部分を占める Rozanov を追うという経過である。

Rozanov が帰国した理由は、孫の Harriet によき配偶者を選んでやるという考えであり、そのために然るべき人物を見つけだすことであった。そしてそのために白羽の矢をたてたのが Tom である。彼は George と母親の異なる弟という関係にある。この計画は先の the Slipper House Riot に連動して失敗に帰する。Rozanov はその事件に George がかかわっていたと思い、二人の関係は決定的に悪化してしまうという展開になり何らかの解決がなされなければならなくなる。結局 George は町の施設で Rozanov を溺死させるという形をとるのだけれども、この小説ではその悲劇的な死をとげる Rozanov に George と同程度の重要性が付与されてここで二人の主人公が並列されているような印象を与えなくもない。ただそれにもかかわらず George の立場は不変でこの小説の中心にある。あるいはその求心力の集まる場所にある。一方において妻 Stella を殺したのではないかという観念を捨てきれず、他方 Rozanov との関係を修復しようとしながらし得ない人物として存在を続けている以上、読者は常に George にたち戻ってこないわけにはいかない。しかも Rozanov の死について、George の考えはともかく実際には彼の死は自殺であって、George が温泉で溺死させたと思った Rozanov はそれ以前に死んでいたし、検視の結果もそのように出た事情を考えるとなるほど George の師としての哲学者 Rozanov は対 George との関係の他の一方を形成することはあっても、中心には置かれない事情が明らかとなる。

しかも我々は、What Happened Afterwards で、

Those who knew 'the old George' are amazed at his 'reform', though it is still true that none of his old acquaintances feels quite comfortable with him. He is gentle, polite, quietly humorous (though he smiles little), attentive to his wife, interested in the details of everyday existence. He even has a modest social life. (p. 565)

あるいは

She [Stella] insists that he seems 'normal'. Sometimes, however, this unnatural 'normality' seems to her too good to be true and she wonders if he will one day suddenly attack her with an axe. As the weeks and months go by, this idea occurred to her less and less often. (p. 565)

ということが知らされて Stella と George の関係は正常なものに戻ったと Narrator N に報告されると、読者は安心こそすれ、反対する理由はないはずである。もっともあまり常識的でかえって落着かないという人はいるかもしれないが。

結局この小説においては、Stella という登場人物の存在を舞台の裏にかくすことによって様々な効果を生じさせ、従来とは異なったものを作りだした作品という評価を与えることが可能であり、それにより小説の領域を拡大している点が注目に価する。

注

Iris Murdoch: *The Philosopher's Pupil*, Chatto & Windus 1983. p. 1.

以下の引用はすべてこの版による。